

(佐)土居外(三)外野、外開(瀕)等で皆平地にある。土居外と外開はそれぞれ土居内、内開と對するものである。前者は成富兵庫をして佐賀藩が築かせた天建寺放水路の土居により、内外に別れたもので、人爲の自然短正が地名にも表はれるに至つたものである。外野のホカは方俗の用語野良の意即ち沖であるものと思ふことが出来る。

出入の方では作出などの出村を除くと、出羽(佐)洗出(筑)といふのが出の方のもので、入は入部(早)大入(糸)深入(東)＝入地(朝)と四つあ

アビシニア國王に謁するの記 (一)

小 牧 實 繁

る。この出入と言ふのは位置詞といふよりも地形に關係ある様になつてゐるのである。入部は脇山内野の入る邊であつて、大入は最初から音讀したか否かは疑はしいにしても配崎の陸繁島に抱かれた澳である。深入は玉島川の谷の又支谷の奥にあつて、字義明瞭である。入地は宮野村から金川村にかけての洪積地と、筑水の右岸即ち古毛、長淵あたりの高みとの間の低地であつて、二十米のコントロールはよく大勢を示し得てゐる。即ち窪み入る意味の入と考へる。

一九二九年五月、巴里大學土俗學研究所が第一回先史時代遺蹟踏査舉行の計畫を發表するや余は直ちに全大學地理學研究所の第三階を占領

する土俗學研究所の助手リヴェー女史(アメリカニスト Rivet 博士の令妹)の許まで參加を申込み幸、快く許可せられたのである。

斯くて楽しいパントコート休日の到來を待つ中に五月十七日は来た。平常朝寢坊の自分も今日は六時に起床、オルスエイ停車場に至る。平常講義室では相見なかつた顔振れも可なり多い。ド・モンフレード夫人の如きも又その一人であつたが、紹介せられて直ぐ舊知の如くなる。斯くて我等は八時八分巴里發、南佛蘭西シヤラント方面に向つたのである。

此の日、初めてモンフレード夫人から令嬢ヅブルに紹介せられた。握手をして初對面の挨拶をすると彼女は既に前から自分を知つて居る、先日巴里郊外サン・ゼルマンの博物館見學の際自分を見たと言ふのである。自分は少しも記憶しないのであるが、博物館見學に行つたのは事實であるから、相見たのも事實に違ひないらしい。兎に角ヅブル嬢は懐し相に一外國人たる自分を見たのである。

アングレーム行の列車は可なり混雜して居たのと既に相知る人々も同行であつたのとで、ド・モンフレード親子とは不幸同室出来なかつたが

アビシニア國王に謁するの記

アングレームからの乗合自動車では皆同室で、令嬢は始終懐し相に余に微笑を送るのであつた。五月十八日、ラ・キナの舊石器時代遺跡に向ふ途中も彼女、未だ女學校在學中で今年十五歳だと云ふ彼女は常に我が傍に歩いて瞿粟の花など摘み、外國人殊に日本人たる余が珍らしいと見え、ラ・キナに着いて舊石器を發掘中も始終我が傍を離れない。ペレー(バスケット)を被て居たのも脱いで仕舞つて余のかくしの中に託すると云ふ始末である。

夕食後古城址と墓地とに散歩しても彼女は不相變我が傍を去らない。月は明かに周く廢墟を照し風は無いが氣は爽かに、浪漫的の感情は油然而として湧くのであつたが彼女も未だ見ぬ東亞の月夜でも空想するか、無言の裏に我が右手を握るのであつた。

翌十九日は午前中、ムステリアン期居住址たる石灰洞を見、又はオーリナシアン期層序を檢討し、午後はペイラの研究室を訪れたが彼女は常に我が傍にあつた。

二十日は自動車でムーチエーなる一寒村に至り、石灰洞側壁に彫刻せられたオーリナシアン期の馬の浮彫を見、正午ロックと云ふ片田舎に着、ソルトトレアン期繪様帶發見の現場を見、發見者マルタン氏の講演を聞いたが終つて諸氏

閑談の間、余は彼女から西洋子供遊戯を教はり日本の五目并べを教へ樂しむ間に辭去の時は來り、六時一同はアングレームに歸り、余は此所で一行と別れて單身西班牙の旅に向つたのであるが、乗合自動車の中でも素早く余の傍に席を占め終日余の側を離れなかつたジズエル嬢が深く余の獨り西班牙に去るのを惜しんだことは勿論で、余も又極みなき別離の悲哀を禁じ得なかつたのである。

前後四日の旅行中彼女が一度ならず余に語つたことがある。自分は東洋人が好きである、學校を出たらば父に頼んで英國に遊學させて貰ひ其れが濟んだら遠洋航路の汽船に乘込み憧れの横濱へ行く、自分の理想は遠洋航路の船長であると。そして又云つた。父は今アピシニアで大

きな地主として開拓に従事して居る、毎年夏休みが始まれば自分は母と共にアピシニアに行く高原の夏は到底も氣持がよい、その散歩は到底も素的だ。日本人の貴方と一所に散歩が出来たならば自分はそれ程愉快なことはないと。

暫らく先史學の研究に熱中して居たとは云へ元來地理學の徒である余の學的好奇心は、忽然余をして未知の國、アピシニアに對する限りなき憧れを抱かしめるに至つたのである。

赤道直下熱帶高原上の散歩、佛蘭西貴族出の少女を媒介として國王への謁見、阿弗利加大陸唯一の國王への謁見、象牙の御土産、空想は空想を産んで果てしもなかつたのであるが、それは全然實現し得ない事でも無いと云ふ氣がした西班牙の旅行中もチチン（彼女は別名チチンと云つた）とアピシニアの事は忘れなかつた。愉快な旅ではあつたがチチンとアピシニアの事とは忘れることが出来なかつたのである。そして巴里へ歸つたのが六月五日であつた。

この月の十二日、ド・モンフレード親子は巴

里を去つてアビシニアに向ふ筈になつて居た。ラキナの旅でのチチンの勧誘、一所にアビシニアに來ないか、若し我々と一所に來るなら自分は非常に幸福で、船中の生活も如何に楽しいことであらうなど云つた言葉を思ひ出すと吾が心は何としても動かざるを得なかつた。

然しながら自分には尙重大な要件が残つて居た。中歐及北歐の旅が未だ濟んで居なかつたのである。若し此の旅を放棄してド・モンフレード親子と共にアビシニアに渡る決意が出來れば早速郊外の夫人を訪れその意を傳へなければならぬのであるが、然しながら歐洲の旅を中止してその儘歸國するのは地理學徒としては上策と思へない。自分はデレンマに陥つた。僅かに理性を以てモンフレード親子を訪れることを斷念し、歐洲旅行決行に傾いたのであるが、然しながら懐しき少女チチンに再會する機會は又何時來るのであらうかなと思ふと多少感傷的にならざるを得なかつたのである。

所が六月十日の夜、親しい友人等とヌーイイ

アビシニア國王に謁するの記

の祭を見るべく夕食後の散歩を試みた所、偶然にも何萬人と云ふ群衆の中でチチンと其の母とに邂逅したのである。全くの奇蹟であつた。深山幽谷の中に戀人と相逢ふならば恐らくこんな嬉しい思ひもするであらうがと思はれた。そして自分は直感した。アビシニアの旅を斷念してはならぬ。今日の再會は神の啓示である、明後日巴里を出發九月四日頃までアビシニアに滞在すると云ふ豫定を聞いて相別れたのであるが自分は歐洲巡見の後歸路を地中海にとり、途中アビシニアを訪れることを決心したのである。

宿に歸ると急ぎ二通の手紙を認め、一通を巴里郊外の住所宛一通をマルセーユ發デブチ行汽船氣村モンフレード夫人宛に出信し、アビシニアの宿の事、旅行に關する心得、費用等に就いて聞く事にしたが、結局二人が巴里出發の際彼等を巴里驛頭に見送ることとなし、時間表を繰つて驛に至り、巴里宛の一通を手渡すと共に尙口頭で色々の事情を聴きボン・ヴォアヤージュを述べる。佛蘭西語が先日よりも更に上達したな

ど賞められ、愉快に別れた。

自分でも不思議な位能率の擧つた中歐の旅から歸つたのが七月廿九日である。今は歸國の準備あるのみ。そして歸途アビシニアに立寄ればよいのである。中歐の旅ですつかり疲れては居るが、マルセーユ出帆までの自分は緊張其のものであつた。

八月六日、食前のポルトー酒を「キャプ・フェー・クルニー」に攝り、附近の書店でエチオピアの太陽「Le Soleil d'Ethiopia」なる小説を求め、中村、太田兩氏等と伊太利料理で別宴をなし、あはただしい氣分の中に八時半下宿に歸り、皆の人々と別れの辭を交し、八時四十五分長く住み慣なれた巴里の宿を出、九時半巴里リヨン驛を發つ。

八月七日、午前十時半マルセーユ驛着「レジナ」と云ふホテルに入る。夕方、汽車中で知り合ひになつた藝術家天田氏と「バスソ」(Basso)でマルセーユ名物の魚料理を食し、永々厄介になつた佛蘭西の美味にさよならする。

八月八日、船中での讀物や、タキシードのボタンや、巴里では如何しても見當らなかつた子供の自動車の玩具や、航海中の日光除けの眼鏡や一通りの必要品も調つたので、天田氏や、西貢行の一佛蘭西青年や等と同車で港に至り乗船する。そして船は正午過マルセーユの港を出たのである。

佛蘭西を去る日本人は到底も感慨無量を感じると云ふ。限りなき別離の悲しみを味ふと云ふ自分も又多少の感慨なきではない。然しながら人の云ふ程別離の悲哀は感じない。それが寧ろ自分でも物足りなく感ずる程である。眼前に自分を見送つて呉れる人が無い精でもあらうか、それともアビシニアが自分を待つて居る爲でもあらうか、それとも故國日本に歸るべき旅先である爲でもあらうか、自分は落着いた氣分で、久しく厄介になつた佛蘭西の陸地を離れ得たのである。

八月十八日、日曜日。午前六時半船は佛領ツマリランド、チブチ港(Djibouti)に着く。外の

氣はひが常とは異なるので目を覺まして甲板に出る何時もながら船の港に入る時の氣持は一種特別のものがあるが、船に近く水中に泳いで旅客に小錢を求めるソマリ土人の聲が如何にも哀れに聞えて特殊の旅情をそそるに充分である。

七時ジャンボンと果物とを朝食に攝り八時下船する。オテル・デ・ザルカード (Hotel des Arcades) のアラビヤ人のギャルソンが四個の荷物を持つて降りて呉れる。此所は汽船の横着けになる棧橋もなく沖がかりであるので小發動船の厄介にならなければならぬ。尤も波はそう大したことはない。ソマリ土人の巡査の様なのがやつて來て(跣足である)旅券を見せると云ふ見せると、暫く預つて置くと云ふ。異國で旅券を取り上げられるなんか餘り氣持のよいものではない。紛失しない様に注意して呉れと頼むが通じたか如何かも心許ない。同船の日本人天田氏には昨日離別の挨拶をして置いた。チブチなんかで下船する日本人は自身一人である。佛蘭西人などでも餘り降りるものは多くない。それ

に今當地には流行病があるとかで見物に降りるものも殆んど無い。そして此所まで同船であつた佛蘭西人や白耳義人などが、チブチの印紙を張つて出して呉れとて澤山の繪端書を自分に託すると云ふ有様である。

税關の検査は至極簡單で、自動車でホテルに入る。

船中で知合ひになつたアビシニア人バシャワラッド (Bashahwarad) 君と同宿である。君はアビシニア國ハラー (Harrar) 舊家も舊家、現國王の從弟に當る人で、早く國を出てコロンボに渡り其處で英語を習ひ勉強をした後合衆國に移り或る田舎の大學で勉強して今度業を卒へ、新知識として郷里に錦を飾る途上にあるのである。現國王ネグス・タファリ (Negus Tafari) は丁度明治維新當時の明治大帝にも當つべき英明の君主で最近數人の留學生を歐米先進國に送られバシャワラッド君も正にその一人に選ばれたのであつた。同君は日本殊に維新以後急速の進歩を遂げた日本の歴史に興味を持ち、特に日本

の教育制度に就いては最大の關心を有し、現實の問題に就いて切りに適切な質問を發し、又余自らの意見を徵すると云ふ有様で互に共鳴して夏の夜の紅海の甲板上に語り續けたのであつたデブチに着いてからも彼は殊に親切である。

唯宿の御かみがバシヤワラッド君に對して餘り親切でないのは不快の念を禁じ得ない。教養の足らぬのは植民地婦人の常であると云つて仕舞へばそれ迄であるが、どうも佛蘭西人はアビシニア人に對して少しく威張り過ぎる嫌がある。アビシニア人は一段下等な人種と考へて居る様な風が見える。殊にバシヤワラッド君はアビシニア有數の中心人物となるべき人であるのにと思へば、第三者としての自分の目にも不愉快な現象として映ぜざるを得ない。

ホテルも民家も商店も、デブチに於ける白人の建物は凡て、如何にして暑熱と強度の光線とを避くべきかに絶大の苦心を拂つて居るのが看取せられる。軒とバルコニーの廣く造作せられて居るのなんかその趣向の一つである。船を

降つて流石に疲れを覺えた。バルコニーの籐椅子に腰を下して悠くりバシヤワラッド君と閑談する。

抜目のないソマリ土人ではある。如何して知つたか何人かのソマリ人がソマリ製の槍とか、團扇とか色々の土俗品を持つて來て、如何かして賣り付け様とする。興味がなこともないのので到々槍を二本買つて仕舞つた。然し二本で佛貨二法と云ふから高いとは云へぬ。

荷物を請取つた後、バシヤワラッド君に伴はれてデブチに於けるアビシニア領事館に至り、館員某氏に紹介せられる。敦厚な人達で氣持がよい。又郵便局に至り「アンゼー」丸船客から依頼せられた義務を果す。自らも若干のソマリランド郵便切手を購ふ。切手の蒐集癖などは無いのであるが、之れは珍品であると思ふ。局員は佛蘭西人が主であるが、アビシニア人に對しては横柄な態度を持つて居る如く見えた。文化的に云つて植民地民族とも云ひつべきものがあると思ふ。

郵便局からの歸るさ頭上に物を戴くソマリ
の女を寫眞したが惜しい事に露出過多で失敗であ
つた。それ程吾々の想像も及ばぬ位日射は強い
のである。

十二時中食。ホテルは佛蘭西人の經營で、料
理も歐風であるが、決して美味とは云へない。
植民地味たつぷりである。尤も料理人にはソマ
リ人が傭はれて居るのだから致方はあるまい。
以前は一支那人が料理人に使はれて居て勤勉で
あつた上に料理も上手であつたとおかみは云
つて居た。飲料としてはソーダ水とオランジュ
ードとがあるが、矢張り田舎の味しか有たな
い。

食後、段々人氣が少くなり急に邊りが靜かに
なつたと思つたら、驚くべし、皆んな食後の午
睡をとつて居るではないか。然しこれは熱帶國
としては絶對的に必要なだと漸く合點する。
おかみも主人も食事が濟むと皆んな自分の室へ
這入つて行つたのは此の午睡の爲であつたのを
知る。

郷に入つては郷に従へだ。それに疲れても居
る。睡ることに不服のあらう筈はない。自分も
第六號室に入つてとろ／＼と夢の國に入る。實
際それは夢の國である。暑い暑い夢の國である
半分は睡て居るが半分は暑さの爲めに苦しんで
居るのである。汽船會社の案内書には家の中で
四十二度とかに氣温が上る様に書いてあつたが
今實際に其れを體驗するのである。四時半まで
寢たのであるが、目を覺ますと何と云ふ暑さだ
！ 蔭の多い家の中で、枕も、布團も、着物も
物皆が人間の身體より熱いのである。紅海や新
嘉坡などが暑いと云つても、それは大體海の上
の暑さである。チブチの暑さは實際に經驗した
人でないと了解出來ぬと思ふ。一風呂シャワーを
浴びて稍蘇生の思ひをするのであるが、元來暑
いのであるからそう氣持よいと云ふ譯には行か
ぬ。そして又何と云ふ日光の強さであらう。本
當に太陽が光り輝いて居るのである。明々と輝
いて居るのである。夕方日の陰つた頃、馬車に乗
つてバシヤワラッド君と停車場へ散歩して見る。

君は迎の人達がアビシニアから降りて来るのに會ひに行く積りらしく、自分は色々な人達が降りて来るのを見物に行くのである。六時に少し遅れて汽車は着いた。アラビア人が降りる、アビシニア人が降りる、ソマリ人が降りる、そして又ヒンドゥッが降りる。一人だけであるが漆

黒のネグロが降りた。これはセネガルの黒人である。とバシワラッド君が教へて呉れる。一寸人種の行列を見る様で、小供心に祭禮の武者行列を見た様な嬉しさを感じる。それに尙興味の深いのは、此等の人間が何れも御土産品や商品をどつさり持つて降りて来ることである。羊や山羊や家禽や、瓢箪に入れたバターや葦竹やその他種々雑多の品物と共に雑然と降りて来るではないか、そして我れ先きにと出て行く。

六時半アビシニア領事館の自動車で宿に歸り暫く休息する。

七時、宿のタクシーを驅つてデブチの市内から郊外に散歩する。アラビア人の家も見えるが勿論堂々たるものは少ない。ソマリ人の家居は

白人街から少し離れた所に分離せられて居るが、その家は木の幹や枝などを以て貧弱に作られて居る。規模も勿論小さい。此の區劃は白人街に比すれば多少穢ならしい感じを起させるが白人の都市計畫によつて建築せられたものであるから町並は整つて居る。

アラビア人の回教寺院が一つある。小さなもので建築も立派ではないが、白く塗られて黄昏の空に浮び出た所は矢張空想に充ちた遊子の心を引つけないでは措かぬ。跣足の回教徒が熱心に祈禱して居るのが見える。

家畜市場がある。主に羊と牛とが賣買せられるのである。

郊外の鹽田は可なり大規模なものである。又たアラビヤ人が沙漠の中に灌漑用の井戸を穿ち植物の耕作を企てて居る所がある。然し名は耕地であるが、荒涼寧ろ凄慘なる感を起させる。總じて郊外から見えた山のただずまひと云ひ、荒蕪たる曠野の様と云ひ、凡てが死と沈黙との表微ならざるはなく、色は黒味がかつて青味なら

その身が淋しい異國、唯ならぬ異境にあるのを
つくづく感ずるのである。此所は果てしもな
く生なき陸地の、彼方アビシニアの高原に續く
所であり、ソマリノ國は人口過多なる我等の國
土より見れば正に沈黙陰慘の國である。

七時半宿に歸り、八時夕食。食後ソマリ人の
徘徊する街の中を散歩、十時まで宿のテラスに
バシヤワラッド君と語り、暑さも去つたので床に
就く。

八月十九日、月曜日。七時半起床。此の時間
ならば未だ暑くはない。朝食を済ませて警察に
行き旅券の返還を要求し、記念として捺印を請
ふ。銀行に行つて兩替をして貰ふ。此所には印
度支那銀行の支店がある。英貨五磅を出したら
アビシニアの貨幣五十ターレル(Thaler)と佛貨
六十五法とを呉れた。此所の銀行は十時半から
三時半まで閉まり、三時半から五時まで開く。
如何に白人が暑さに閉口垂れて居るかが解る。
尤も身體を大切にして居ると云へば云へないこ
ともないが。中食後は午睡を斷念して三時まで

アビシニア國王に謁するの記

日記を記す。實際午睡することは暑さを増すこ
とである。起きて緊張して居た方が幾分冷しい
様な氣がする。又實際ソマリ人などは午睡しな
い証據に此の時間でも平氣で街を歩いて居るの
である。日記を記しながら通りすぎるソマリ人
をつくづく見る。彼等は非常に身體が細くすら
りと瘠せて居るのが特徴である。實際骨と皮の
人間が多いのである。焼ける様な地面を跣足で

第一圖



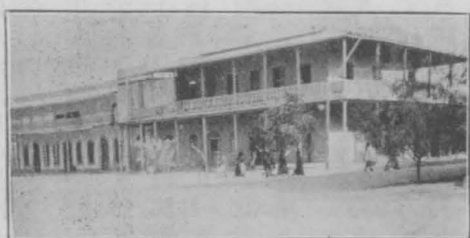
歩いて行く。(第一圖)但皮製の草履を穿いて居るものも偶には見受ける。

フォッシュ元帥傳を讀んだ後五時から六時まで一寸假睡する。此の時刻は大分暑さも凌ぎ易いのである。

寢る前寫眞を數枚撮つたが矢張失敗であつた現像して出て來る筈のソマリ土人は甚だかすかにしか出て來ないのである。第二圖は熱帯の建築と頭から黒い布を被つて行く女達とを示す。

六時半停車場附近を散歩する。海岸には、何處から持つて來たものか白色の珊瑚岩が見られる。

今日も未だ汽車は出ない。七時半夕食、食



第二圖

後テラスで休息し、日記を書いて十時就寢。幾分退屈な一日であつた。

八月二十日。中食後無聊なるままに、バシヤワラッド君と一所に街を散歩して見る。倉の様な家の中でソマリの女が珈琲の實を選び分けて居るのを見る。之れはアビシニアの方から來るものに違ひないが、本場に來て實物を見る感じは又一種特別のものがある。

家畜市場に行つて見る。羊肉や家禽や、オレンジ、シトロン、無花果などの果物や葱、サラダ等の野菜や雞卵、魚などが、賣られて居る。大體市場は皆んな左様かも知れないが、此所の市場も餘り綺麗な所ではない。然しソマリにも市場があることを興味深く見た。

回教寺院に行つて見る。跣足でなければ入ることを許されぬ。一人のソマリがメッカの方に向つて一生懸命御祈りをして居るのを見た。

吳服屋を見る。吳服屋は何處にでもある譯であるが、ソマリのな吳服屋が私を引着けた。然し勿論大した品物はない。安物が多く美術的の

價値もそうある様にも思へぬ。

床屋は多くヒンドゥ人が營んで居る様である。街全體が新開地であるから、カイロの様な古典的な情趣は少しも味へないが、ソマリ人街には勿論ソマリの情趣が大分漂つて居ることを看過することが出来ない。

午後四時アビシニア領事館に至り旅券の査證を受ける。明日は愈々アビシニアに向ふのだと思ふ。それと一方エム・エム會社支店に至り此の次の汽船の出帆期日等に就いて問合はせて置く。

八月二十一日、水曜日。午前四時半起床、五時過朝食。パンと牛乳とであるが少しは慣れた不味いとも思はないばかりか、一種の味があると考へる様になつた。ソマリ人のボーイ、と云つても大分の御爺様で、佛蘭西語を片言交りに話すボーイが運んで來るのである。跣足で、顔や手足も黒く、初めは穢ならしいと思つたが慣ればこれも親しい人間である。歸つて來るまで荷物を大事に倉庫に入れて置くからなど親切

に世話を焼いて呉れる。人間の感情に國境や人種の隔がある譯ではない。これも中々親切な御爺さんだ

第三圖



日本の田舎を旅行する氣持である。唯アラビ

ヤ人のギャルソン(第三圖)は少々金を欲しがり過ぎる。氣が利いては居るが、誠意が足りぬ。然し日本にだつてその種の人間は居る筈で、別段此の若者丈けを咎める譯にも行かぬ。

五時四十五分宿の自動車で驛に送られ、六時半デブチ驛を發つ。

デブチを過ぐれば汽車は唯荒涼たる沙漠の如き熔岩臺地の上を走る。尤も沙漠と云つても多少の乾燥地性植物は見られぬ事はない。

七時五分 Chebele と云ふ小驛に停車する。此所までは殆んど一軒の家をも見ず、眼に入るものは唯火山と碌々たる石山の如き熔岩臺地と

第四圖



であつたが、此所には小數ながら家が見られる。小さな石造の家である。(第四圖) 又石葺きの墓地を見る。中央に矩形の土を盛り之れを礫石で葺きその兩端に二本の稍大きな石を立て、此の矩形の墓地に繞らすに環形の鏈石を以てして

居る。

九時半

Dashiou と

云ふ小驛に

停車した時

土人の家屋

を撮影した

が(第五圖)

之れも失敗

であつた。

十時十分



Ali-Sabiet と云ふ小驛に着く。之れは佛領ソマリランドとアビシニアとの國境驛である。此の邊には山羊や駱駝が可なり多く見られる。

十時五十分 Daoenle と云ふ小驛に着く。此

れはアビシニア領内最初の停車場であるから、その前に旅券の検査があるが極く簡單なものである。ソマリ人の子供は哀れな聲で金や食物を乞ふ。五月蠅いと云へば五月蠅いが、單調な汽車の旅に時々變化を與へると思へばいいし、第

一その骨と皮の様に瘠せこけた身體から搾る様にして出す悲しい聲を聞いては同情の心も起らぬことはない。殊に其の顔や皮膚は黒いが、顔立ちなど可なり可愛いものもあるに於いてをや。アビシニア人の巡查の様なもの、鞭や槍や棒などで追ひ拂ふが、又蠅の様に集つて来る。本當に貧しくて食へぬための乞食、病氣で食へ

ない爲めの乞食の外に、乞食が悪いこととは知らずに、列車が通る時を楽しみ待つて金や食物を乞ふ者もある様である。實際愛嬌たつぷりで汽車が走り出してからでも汽車と競走して隨い

第六圖



て來るのなどもある。旅客も慣れたもので、彼等の努力に報ゆるため車窓から小錢を投げて居るのがある。

第六圖、第七圖は列車の着くのを樂しみにして驛へ

集まつて來る土人の子供等を示す。(アリ・サビエット驛)

十二時五十分 Aicha と云ふ驛に着く。汽車は此處で一休みで、旅客は下車して驛前、と云つても大體野の中の様な所であるが、其處のピユフェーで定價十二法の中食をとる。但し之れは一等客及び二等の白人達で殆んど全部の椅子を

アビシニア國王に謁するの記

第七圖



占めて仕舞ふ。列車中で豫約して置くのである。ピユフェーは大抵下等な佛蘭西人又たは希臘人、アルメニア人等が會社の認可を受けて經營して居るのである。勿論美味なるものを食べる事は出來ぬが、清潔にはしてある。

その他の旅客は大抵辨當持參であるし又驛附近の土人が土製のパンや乳やその他何とも形容

の出來ぬ様な食料品を汚らしい器に容れて賣りに來て居る。

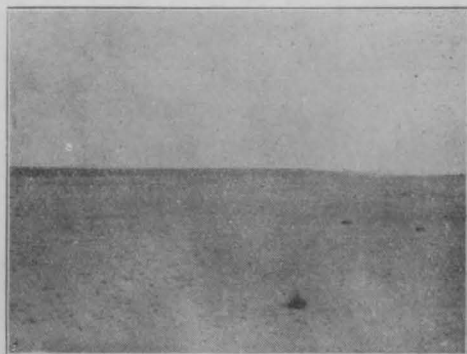
一時二十分汽車は此の驛を發する。此の附近は誠に平坦な沙漠であるが植物は可なり豊富である(第八圖、第九圖、第十圖)。そして處々に池

第八圖



があるかと思はれる様に蜃氣樓が立つて居る。動物では山羊、羊、駱駝、驢馬が多。更に進む

第九圖



と至る所に可なり大きな土塔を見る。これが蟻塚であるのをバシヤワラッド君から聞いて知る程動物學の教科書で見た通りである
六時三十分
El Bad と云

ふ驛に着く。此の邊は土地も大分高く雨量も多い爲め可なり樹木が多い。そして動物では牛、驢馬、駱駝、羊が多い。此れまでの驛でも氣が着いたことであるが、アビシニア人は長者に對しては腰を屈して丁寧な御辭儀をする。丁度日本へ歸つた様な氣持がする。挨拶は到底も慇懃である。そうかと思ふと一方では歐羅巴風の接吻もする。國初より敬虔な基督教國であつて歐

第十圖



羅巴風の所も可なり多いのである。所が御辭儀などは最も日本的で何と云つても奇體な國と云はなければならぬ。

八時デレ・
ダウア(Dire-Daoua)に着。

殆んど一時間半の延着であるが、何人も別段それを意に止めて居る様にも思はれない。流石に呑氣な國である。又實際そんなに急ぐ必要もないのである。夕食を食つて寝ればいいものらしい。伊太利館(Hotel d'Italie)と云ふのに入る。此所の汽車は夜は走らないのである。旅客は皆んな荷物を持つて下車しなければならぬので不

便と云へば不便であるが、盜難に罹るよりは増しなのである。然し不便なことも不便である。赤帽の徽章を附けた人間が居るではなし、土人が雜然と荷物を持たせて呉れとて集つて來る丈けで泥棒と良民との區別は勿論外國人たる我等に解る筈がない。然し皆んな片言位は佛蘭西語が解るらしく、割合に忠實に荷物を旅館まで運んで行く。

デレ・ダウア、此所は最早やアビシニア高原の上で樹木なども多く、第一涼しくて氣持よく、相當の家居もあり、旅館も可なり美しく、室内も明るく、心細い思ひはさせない。八時半夕食の卓に就く。

夕食後、街の中を散歩し、涸川を渡つて、發動機の音を目當てに、ド・モンフレード氏の工場まで行つて見る。生憎く工場監督の夫人丈けが在宅で、モンフレード一家の人達はハラルの所有地へ出掛けて居て未だ何時歸るとも不明であるとの事である。一寸失望したが、幸の様にも思つた。若し此所で止められたら肝心のア

チス・アベバ行が危くなるだらうから、明朝の出發が早いので九時半就寢。

八月二十二日。五時起床。尾籠な話しになるが便所が室からは大分遠い所の庭の中にあつて燐寸を磨つて豆洋燈をつけて用達しをすると云ふ有様で、そして可なり不潔である。こう云ふ所は日本の田舎でも餘程の片田舎に行かぬと思ふ。

六時半朝食、食後アビシニア政府の建物のバルコニーに登つて見て、バジャワラッド君とデレ・ダウアの地形を概観する。デレ・ダウア自身は小さな微々たる町であることを知る。想像とは大分違ふ。餘り暑くなくて住み易いので佛蘭西人初め比較的多くの白人が集つて居ると云ふ丈けのことであらうと思ふ。

七時半汽車はデレ・ダウアを發つ。水害のため鐵橋が落ちて徒歩連絡の箇所がある。荷物の多い旅客には可なりの苦痛である。荷物運搬手の中には盗人が居るかも知れぬから注意する様にと云はれて見れば尙更に苦痛であり不安である

何を好んでこんな不便な所へ來たのかとも思つて見る。然し流石に日本人だ。割合に要領よく迎への列車中の人となる。然し徒歩連絡の御蔭で中食が遅れて二時半になつた。可なり困難な旅行ではある。此の邊にも牛、驢馬、羊、山羊家禽等が數多く見受けられる。又列車中から野生の猪や、野生の羚羊やが見えるから豪氣である。植物として

第十圖



ではアカシアミモザ即ち合歡の木の種類があり、丁度今が花盛で美しい一種の景觀を呈して居る。これと仙人掌とが最も多く人目を引く。此れがア

第二十圖



ビシニアの此の地方植物景觀の一特徴と云へると思ふ第十一圖、第十二圖はアカシヤの群落を示す。

八時半ハウアシト(Hauache)に着。鐵道指定の旅館

に入る。矢張り一々荷物を運ばなければならぬ此所は狩獵客の多數集る所と云ふが、矢張淋しい一寒村に過ぎない。狩獵の中心ともならうと云ふ所がそう繁華な所であり得る筈はないが、も少し賑かな所かと想像して居たのである。御客が多く室は満員と云ふ有様でホテル丈けは賑かではあるが。九時夕食、食後、規那の錠劑を

アビシニア國王に謁するの記

第三十圖



服用して置く。之れはマラリア蚊が多くて危険であるからとて、バシヤワラッド君がチブチから買つて來た希臘製の賣藥錠である。九時就寢。寢臺は西洋式であるが成る程各室とも蚊帳を吊つて居る。矢張り蚊が多いんだと思ふ。

八月廿三日、金曜日。五時半起床、六時朝食

朝食も西洋式である。六時四十五分アウアシユ驛發。驛を出て暫くすると早くも野生の羚羊が見られるかと思ふと又美しい牧地が認められる。八時メタハラ(

Metahara) 驛着。此の驛の手前に明瞭な火山と熔岩流とを見る。寫眞を撮つたのが第十三圖である。

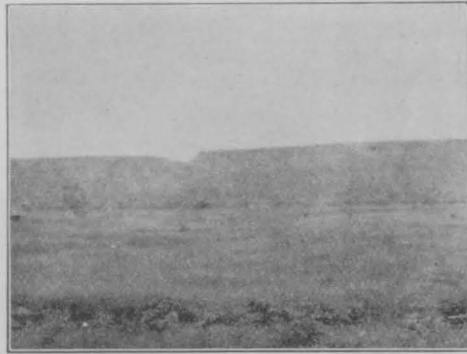
九時四十五分マルカ・デロ驛 (Malca-Diro) 着此の驛の手前に木棉と玉蜀黍との耕作が認められた。又此の附近には火山湖、噴火孔 (第十四圖) 熔岩洞 (Lava cave) 熔岩流、熔岩臺地 (第十五圖) 等が見られ、アビシニアが火山國であることを確實に認識する。而して其處には牛、羊、驢馬、馬の群を數多く見るのである

十一時半ウーランケチ (

第四十圖



第五十圖



る如くプランが圓形なるものであり、第二の形式は第十八圖に見る如くプランが矩形であるのである。家根を葺いた藁か、萱かの先端を束ねて直立天に向はしめて居る手法も又興味あるものである。

午後二時過モデヨ (Modjo) 驛着。ピュフェーで中食。組織も料理も大體昨日、一昨日と同様で

Oulanketi) 驛に着。此の附近には非常に奇妙な恰好をした家屋がある。寫眞したのが第十六圖である。民家の形式には大體二種類ある第一の形式は第十七圖に見

圖六十第



嘴つて居る。中々美味いおやつであるらしい。
又此の邊には可なり耕地が多く、玉蜀黍、小麥
豌豆等が作られて居る。牛に耕させ手で草を取
つて居るのが見られる。耕作景から見れば日本

ある。

四時ト

ウカム

(Dou-

kham)

驛着。

此の邊

の土人

は琉球

邊りで

も見る

様に生

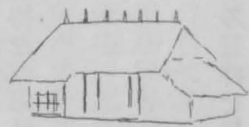
の甘蔗

の莖を

圖七十第



圖八十第



人には親しみの淺からぬものであり、殊に滿二
年日本の風物を見得なかつた自分にとつては何
だか日本に歸つた様な感じを起させたのである
樹木としてユーカリプタス (eucalyptus) が
可なり多く見られる。然しながら何かしら此の
國土には調和しない感じを起させるので、バシヤ
ワラッド君に聽いて見ると、之れは今から約五
十年前オーストラリアから輸入せられたもので
あると云ふ。

首府アヂス・アベバも近づいたらしい。耕地
が次第に多くなり民家の數も漸く加はつて來る
心の中の落着かなさ、今や憧れの土地に着くか

と思つての軽い心臓のちどり、それは嘗てニューヨーク、ロンドン、パリを初めて見る直前に經驗したと同様の落着かなさと心臓の鼓動とである。

アデス・アベバの近くに小さな火山性の丘陵があり、その中に洞窟があり、土人が之れを住居に利用して居るのを見る。所は異れど、嘗て北米クリフ・ドゥワラー (Cliff-dweller) の遺跡や、佛蘭西中央高原中の火山性洞窟が居住に利用せられたのと全く趣きを同じくする。

六時三十分終にアデス・アベバ驛に着く。驛は佛蘭西人技師の設計になるもので一部佛蘭西人は大分自慢の様であるが、そう自慢する程立派なものでもない。又實際そう立派ではない方がよい。アビシニアには却つてその方が似つかはしいから。

伊太利ところ

ぐ (二二)

瀧川 規 一

税關の検査も、旅券の検査も共に極めて簡単である。唯何と云ふ混雜と不秩序とであらう。先日デブチで見たと聊かも異なる所はない。而して今や自分が此の混亂と無秩序との渦中にあるのである。眞に文字通りの渦中である。

幸、帝國ホテル (Imperial Hotel) と云ふ旅館の主人に捕まつた。彼れは希臘人であるが、早くも自分が日本人であることを知り獨りでに自分を外交官と決めて仕舞つたらしい。税關も旅券検査所も唯威張り散らして通つて行く。出迎の自動車に乗ると到底も御世辭を振り撒いて仕方がない。此のよい土地に一人の日本人も居ないと云ふことは残念である、日本人の様に商買上手な人間が一軒の商店をも持たぬのは遺憾である等勝手な事を云ふ。

【ダンテとプレートの愛の哲學】ダンテの完き喜悅と武士道の中世的戀愛と希臘式男性友愛

との三巴の關係を説明せんとする氣持を起したのにはベアツリチエの家を訪れダンテの生家を訪